

地球温暖化 研究の今

研究コーディネータ 松本 光朗

最新のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）第5次評価報告書は、2100年の気温上昇を2℃未満に抑制するには、今世紀中に温室効果ガスの排出をゼロにすることを要すると報告しました。また、気候変動枠組条約では、全ての国が参加する2020年以降の新たな枠組みについて、2015年末のCOP21（第21回締約国会合）での合意を目指しています。今、地球温暖化の問題は、科学面から社会面からも、新たな局面に向かっていきます。

このような中で森林分野の対策にも大きな期待がかかっています。森林分野の緩和策には、森林によるCO₂吸収・蓄積と、木材利用による排出削減といった2つのアプローチがあり、それぞれの国に適した緩和策を考える必要があります。また、温暖化による悪影響を回避する適応策も併せて進めていく必要があります。森林は気温、降水量といった気候条件のもとに成立しており、地球温暖化により様々な影響を受けます。まず、その影響を観測することが適応策の第一歩になります。

このような背景から、本特集では森林分野の温暖化研究について、緩和策と適応策に関わる最新の温暖化研究を紹介しましょう。



第5次報告書について議論するIPCC総会の様子